

2018年1月7日

麻生教会主日礼拝 説教

「命の水を飲もう」

ヨハネの黙示録21章1節～8節

久保哲哉牧師

1. 新成人祝福式 —子どもは神さまから授かった「謎」である—

新年、あけましておめでとうございます。特に今日は先ほど子どもたちに紹介しましたが、礼拝後に成人祝福式を行います。このことは卒園したみなさんにとっても心温まることに違いありませんが、教師の側からみましても幼い頃に関わった園児たちがどのように成長したのか。この目で見てみたいという気持ちがいつもあるのです。その願いが今日、適ったのです。そのことをとてもうれしく思っています。

なぜ、わたしたちがこの出来事をととてもうれしく思っているのか。昨日、一昨日の研修会で知ったのですが、日本では子どもは「授かり物」とか「宝物」と言われますよね。それで神様からのプレゼントとしてありがたいものとして受け取るのが日本流かと思います。しかし、アメリカでは「子ども」のことをなんと表現し、家庭に迎え入れているか。皆さんご存じでしょうか。

かなり衝撃を受けたのですけれども、アメリカでは「子どもは『謎』である」と言われるそうです。しかし、その言葉を聞いたことで、今日、僕とはほとんど面識がない新成人の祝福にもかかわらず、なぜこれだけうれしさを感じているのか。このうれしさがどこからきているのか。その謎が解けたような気がしています。

確かにそうなのです。自分の子どもを見ていても子どもというのは謎なのです。毎日が謎解きの連続です。先日、長男と風呂に入る入らない問答をしたときのことで。一通りやりあった後、頑なに「入らない」と言うので「今日はもうお風呂に入らなくていいよ」と声をかけました。ですが、目を離れた一瞬の隙に・・・本当に一瞬の隙にです。自分が入浴しようと浴室の扉を

開けると、そこにはすでに全裸で裸踊りをしている長男の姿がありました。本当に謎です。意味がわかりません。確かに一見謎なのです。けれども、豊かな可能性に満ちている。この本人もよくわかっていないであろう不思議な力に確かな方向性が与えられ、そのエネルギーが豊かに発揮されたならば、この子はどのように育つのだろう。非常に興味深いのです。

しかし、幼稚園教師のはがゆい所は3年という短い時間ではその「謎」が解けるときを見ることができないことだと思います。職員室ではあの子はどう大きくなったかな。とか、今頃何しているかなとか。そのような話が出る可能性があります。その一つの答えを今日、当時の教師と友にこの目でみることができたことが、麻生明星幼稚園としてもとてもうれしいことなのだと思います。だいぶ思いつきでやっているのですけれども、こういうのをインスピレーション・聖霊の働きというのだろうと思います。

2. 自分が何者かを知るーアダムとエバの失樂園からー

人生は謎解きであると言われることがあります。その謎解きの最初のものには「自分は一体何者か」を知るということだという実感があります。僕自身のことを鑑みても、自分自身が一体何者なのか。つまり自分の賜物はなにか・その賜物を持ちいて何ができるのか・人生の目標は・何が楽しくて何が悲しいのか等々・・・その「謎」が解けたのは二十歳をゆうに過ぎた頃だったと思います。けれどもあえて問いましょ。ここに集うみなさんは自分は一体何者であるか。その謎を解くことができたでしょうか。今日、ともにこの礼拝で聞く御言葉が、その鍵になればと願います。

それで、毎度狙ったわけではないのですけれども、今日というこの日にヨハネの黙示録21章が読まれたことに、主なる神の導きを感じておりまして、とてもうれしく思っています。というのも、ある牧師が今日の箇所について次のように言っているのです。

「注意せよ。これがこの書簡ならびに全聖書の主要部分であり、その中心である」

これは今から500年前、ルターという人がそのように語ったと伝えられています。今日の箇所が「全聖書」の「主要部分」であり「その中心」。そのような箇所を青年たちとみることが出来ますことをとてもうれしく思っているのです。なにゆえ今日の箇所が聖書の中心なのか。聖書本文をみていきましょう。21章1節以下。「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった(黙21:1)」とあります。

ここで言う「最初の天と地」とは天地創造の際に作られた天と地です。実はこの「最初の天と地は去って行き」という表現。1章前の黙示録20章11節をみると「天も地も、その御前から逃げて行き、行方が分からなくなった」とあるのです。これは面白い表現なので、今日はこれだけに絞ってお話したいと思えますけれども、思えば創世記において、最初の人、アダムとエバがエデンの園で暮らしていたときのことです。主なる神によって「食べるな」と命じられた「善悪の知識の木の実」「命の木の実」を食べてしまったことがありました。そのときに、神の掟を破ってしまった「後ろめたさ」からでしょうか。そのことがばれたらまずいという「恐れ」からでしょうか。アダムとエバは神の前から隠れて、逃げました。「勇気をもって身を引く」というのはまっすぐで聖書的かと思うのですけれども、「アダムとエバ」並びに「最初の天と地」が逃げたのは別の理由でありましょう。

神の掟を守って、まっすぐに、元気に生きているとき。神が用意してくださったエデンの園は楽園であり、そこは彼らの居場所でした。けれども、神さまとの約束を破ってしまったことで生き生きと生きることができなくなり、エデンの園は彼らの居場所ではなくなっていました。主なる神は「極めて良かった(創世記1:30)」とあって創造されたにも係わらず、自分自身が何者であるかを知ったときに「その言葉通り」の「極めて良い」存在ではなかった。しかもその見られたくない現状。隠しておきたい恥ずべき部分。一番見られたくない部分を父である神様に知られてしまったことを恐れ、戸惑い、ここは自分の居場所ではない。自分は受け入れられるはずはない。それでいたたまれなくなって神の御前から逃げたのだらうと想像するのです。

しかし、結論からいうとこれはアダムたちの勘違いでした。だって神様はアダムとエバを愛し、そのままの、ありのままの状態で「極めて良かった」と受け入れてくださっていたのです。それをアダムとエバの側の理由。自己中心によってその世界(神との関係)が壊れたと誤解をし、恐れを抱き、逃げた。これは悲しいことですが、人間、そういう弱さを持っているものなのだと思います。

この世界が新しいエルサレムから逃げた理由も似たような所だと思います。神様はわたしたちのこの世界を「極めてよい」世界として作ってくださりました。でも、現実はどうでしょう。わたしたちの現実の生活に目をやりますと、わたしたちが住んでいる世は山あり谷あり、色々なことが起こります。災いとしかいいえないようなことも色々な所で起こっています。人間の心の問題・罪のゆえに争いがあります。貧困があります。悲しむ人がいます。涙を流している者がいます。これは人ごとではないでしょう。

この世界はまっすぐに生きようとすればとても生きにくい世界です。力なき者、弱き者は押しつぶされてしまうことが多い。今悲しみの中にいる人、涙を流さざるを得ない人。この現状から逃げ出したと思わざるを得ない現状がある人もいることでしょう。

思い起こせば、僕もそうだったのですが、僕の友人は逃げ癖がある者がおおくて、友人の一人は高校を中退しました。遅刻ばかりすると成績不良。教師に見つかれば怒られてばかり。それで学校が自分の居場所とは思えなかったのだと思います。僕は彼に学校に残ってほしいものですから、その授業を欠席したら留年・退学となってしまう土壇場で、その授業が始まる2時間前に電話をして、必ず来るようにと念を押したのですけれども、彼は結局、授業にこなかった。授業が終わった後電話をすると「ごめん」と笑ってそのまま学校を退学。

悲しかったですが、そんな彼は今はミュージシャンとなり、どうやら自分の居場所をみつけて元気にやっているようです。僕は彼が高校を卒業するのが幸せだと信じて色々お節介をやりましたが、彼にとって学校は居場所ではなかった。彼は自分が何者なのかを知っていた。それで僕とは別の彼にとっ

で相応しい道を通っていった。自分を知るといのはやはり大切なことです。

また大学を一単位も取らないで退学した者もいます。まじめな男でしたから、学校には行っていたのだけれども、授業には一度も出ずに図書館に籠もっていた。彼は見事にニートになったと聞きました。今どうなっているのか、連絡が取りづらい所がありますが、高校を卒業したあとに、家族以外に自分の居場所を見いだすことができなかつた。そして実際に一番安心できる自分の部屋へ逃げたということなのだと思います。

またもう一つだけ。二十代で社会に出たてのときに、自分で命を絶って、この世界から逃げてしまった者が二人います。今分析すると、色々な要因はあったのでしようけれどもおも逃げ込んだ先である「自分が育つた家庭」ですら自分の居場所ではなかつた。安息が与えられなかつたということなのだと思います。

社会といのは大変な所です。自立するといのは大変なことです。学校や保護者は社会の厳しさから子どもを守ってくれていますが、それぞれがその守りから卒業し、自立して生きるためにはどうしたらよいか。それぞれの友人から学びました。「自分が何者であるか」を発見し、「自分の居場所」を閉じこもつた場所ではなく、自分の居場所を「人々の間にもつ」ということだといと思います。人生は山あり、谷ありの連続ですから、そうした場所で元氣をもらっていかないと身体も心ももたないのです。

しかし、「逃げなくて良い場所」「着飾ることなく、ありのまま受け入れもらえる場所」「無条件で愛してくれる場所」。そのような場所はこの地上には案外すくない。それも自分が何者であるかわかつていないと、そこにたどり着くことができない。サッカーが好きなのに野球部は居場所にならない。これは若者だけの話ではない。30代でも60代でも大切なことといと思います。僕は知っている。実は身近にそういう場所がある。その場所こそ「教会」だといことです。

3. わたしたちの居場所である麻生教会

この麻生教会には様々な人々が集います。卒園生であつてもいい。卒園生

でなくてもいい。職業も、趣味も、年齢も、出身地も。こんなに違った人々が集まる場所というのはこの地上では珍しいと思います。何がわたしたちをここに呼び集め、ここを居場所としているのか。それは主なる神の存在です。私たちは神に愛されている。その事実を御言葉によって確認し、元気をいただくために、私たちはここに集っている。「逃げなくて良い場所」というか「逃げてきてよい場所」といってよいと思いますけれども、自らの居場所がなくなったら是非、教会に来るとよいでしょう。

最後にその理由をお話して終えましょう。礼拝後の祝福の後で歌うことにしている「きみのたまものと」という歌詞に注目しましょう。この2番がとてもよい。

2番 きみのたましいを すべてささげて
神のわざのため つとめいそしめ
神はひとの世に 御子をあたえて
きみの立つことを 待っておられる

よい歌詞です。讚美歌21になったら変わってしまいましたので今日は昔の判を用いました。「きみの立つこと」とは神の御前に立つこととあってよいと思います。神を目の前にしてアダムとイブのように逃げないで立っていることと読んでよいと思います。今日読まれた黙示録の最後には「おくびょうな者」や「うそを言う者」は第二の死を迎えることが記されています。わたしたちは魔術を使ったり人を殺すなどとんでもないことと考えておりますけれども、「臆病な者」「うそを言う者」というのは刺さります。そのような者は神の国に入ることはできない。というかアダムのように神の前に立つことができなくて、逃げてしまわざるを得ないのでしょうね。しかし、そんな罪ある私たちの罪を赦すために「神は人の世に御子を与えた」のです。最初の天と地で「命の木から食べるな」と命じられた神が、新しいエルサレムでは「命の水を価なしに飲みなさい」と命じられている。

そして「自分とは何者か」を知り、臆病にならざるを得ない、自分を偽らざるを得ないという悲しみの中にある者の目の涙をぬぐってくださるときがくる。臆病は罪です。嘘も罪です。逃げるのも罪です。その罪を赦し、取り去り、元気にまっすぐに生きるために主イエスが命をかけて十字架におかかりになった。ここに本当の愛がある。

もっといえば、自分の賜物というのは自分のために生きていたら多く与えられない。自分にとって本当に必要なことって限られていますから。それが、隣人を愛し、隣人の必要に応じていくことで、多くレベルアップしていく。もっといえば、主なる神が私たちを必要としてくださるとき、その用いられ方は無限。全能であられるがゆえに、必要とされることも限りない。神を愛し、隣人を愛する中でわたしたちは「神から与えられた賜物」に必ず気づくことができる。自分が何者であるかを神から知らされ、居場所もいただき、「必ず」「立つこと」ができる。そのために神は人の世に御子を与えてくださった。この恵みに感謝しつつ、主の年2018年を進みたいと願います。

共に祈りをあわせましょう。

愛する主イエス・キリストの父なる神。

今日、この新年最初の日曜日。このように多くの方々と礼拝を守ることができましたこと。感謝をいたします。弱さをいなく私たちであります。けれども、御言葉に従う中でどうぞ、あなたの必要に応じていく力を与えられますように。人生は困難な旅路でありますけれども、聖霊の導きによってあなたの愛に力をいただき、立ち続けることができますように。導いてください。愛する主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。